

第4章 東広島市の歴史文化の特性と関連文化財群

第1節 東広島市の歴史文化の特性と地域性

本市の大部分は歴史的に安芸国賀茂郡に属し、西条盆地という広い洪積台地を有する。このような本市が持つ自然的、地理的、文化的側面から本市の特性を見ると以下の諸点が挙げられる。

○広島県内最大の洪積台地地域である（『広島県史』地誌編）

○瀬戸内海気候に属し、四季を通じて温和であり、雨・雪共に少なく台風や地震等の災害も少ない（『21世紀の新しいまちづくりに向けて』）

○内陸に位置することから一日の内での寒暖差が大きい（『21世紀の新しいまちづくりに向けて』）

○山裾部の入り組んだ谷に沿って広がる水田等、耕作適地が多い（『東広島市 緑の基本計画報告書』）

○水系の最上流域であることや、雨が少ないことから、溜池が多く造られている（『東広島市 緑の基本計画報告書』）

○江戸時代（19世紀）以来、賀茂郡は安芸国最大の耕地面積を有す（『芸藩通志』『広島県の農業地帯』）

○遺跡数の多寡に見る人口増加の画期（経済的な画期）

- ・弥生時代中期～後期（1～3世紀）
- ・平安時代末期（12世紀）
- ・室町・戦国期（15～16世紀）
- ・江戸時代後期（18～19世紀）

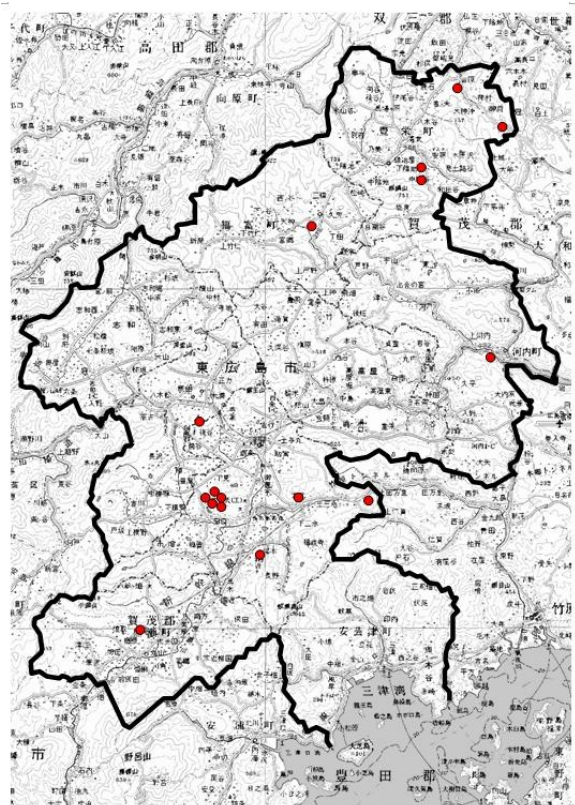
○大規模遺跡に見る政治的拠点が置かれた時代（政治的な画期）

- ・古墳時代中期（三ッ城古墳）5世紀
- ・奈良時代（安芸国分寺）8世紀
- ・室町・戦国時代（鏡山城跡）15～16世紀

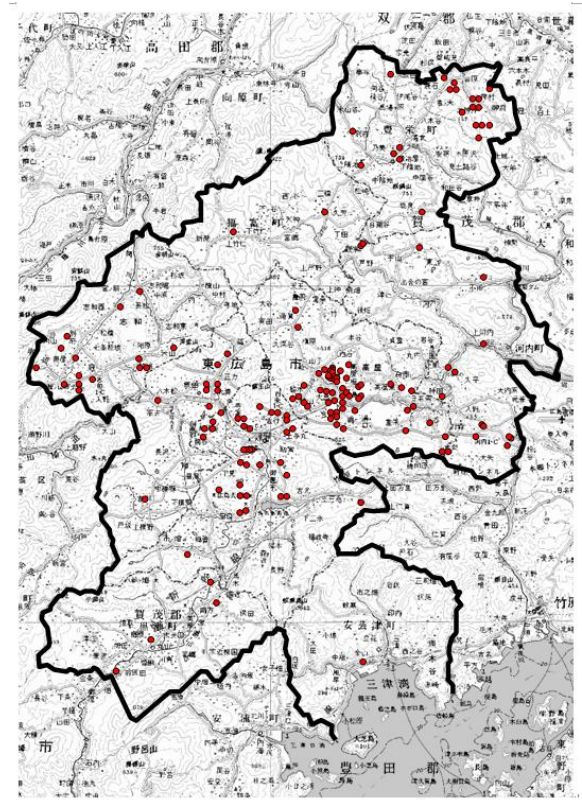
○古代から現代に至るまで陸上交通の要衝であり、賀茂台地の中心である

東広島市の歴史文化の特性は上記の諸点との関わりで語ることが可能である。市の中心部が標高200mほどの台地上に位置し、しかも盆地であることから、一日の内での寒暖差が大きく、農作物の生育に適している。一方でこの地形と瀬戸内海気候は、水不足を招きやすく、西条盆地内だけで1200を超す溜池の築造につながった。

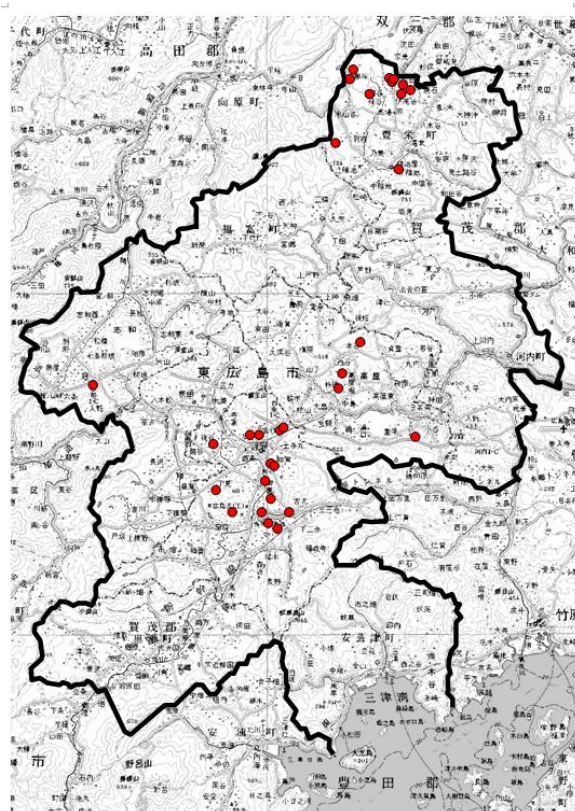
考古学的に見ると、弥生時代中期以降、低丘陵上を中心に集落遺跡が爆発的に増加しており、水田稲作の普及とともに盆地内の人口が飛躍的に増えたことを示している。遺跡数が前後の時代よりも顕著に増えた時代は、弥生時代中期～後期以外にも12世紀の平安時代末期、15～16世紀の室町・戦国期、18～19世紀の江戸時代後期などいくつか見られる。これらも耕地面積の拡大、農業技術の改良に伴う生産性向上等による人口増加がもたらしたものと考えられる。この現象は、別のいいかたをすれば、地域が経済的に豊かになったともいえる。また、大規模遺跡の存在は、その遺跡が営まれた時代に何らかの政治的な拠点が置かれたことを意味している。そのような拠点が営まれる前提となるものが、地域の生産量の大きさであり、陸上交通の要衝という性格である。



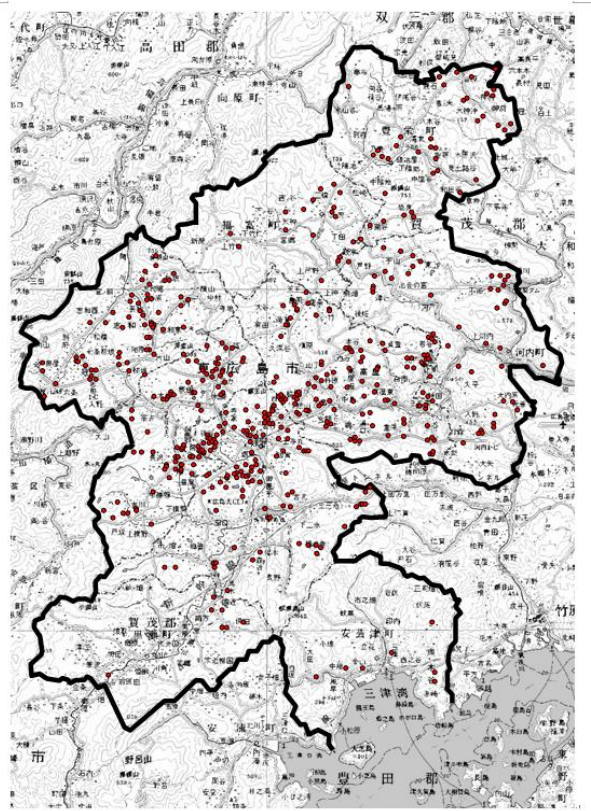
縄文時代



弥生時代



奈良・平安時代



中世

図 4-1 縄文から中世の遺跡分布

陸上交通の要衝といいながら、その陸上交通は海との結節点を持っていない。この点は、安芸国が古代からの交通の大動脈である瀬戸内海に面しているという点から見るとマイナスの要素ともいえる。しかし、安芸国の沿岸部は多くの浦々が孤立して存在しており、陸上交通とのつながりを持つ浦は極めて限定的である。一方で、西条盆地は内陸部の台地ながらも瀬戸内海への最短ルートとなる安芸津地域を外港とすることで、穀倉地帯は外の世界とつながるのである。安芸津町三津は「御津」に通じ、古代の公的な役割を推測させる。やがて、中世、東西条を本領に組み込んだ大内氏は、安芸津町地域を東西条に含めている。また、江戸時代には三津に広島藩の御米蔵が置かれ、賀茂郡及び一部の豊田郡の年貢米がこの地に運び込まれ、大坂の蔵屋敷に運ばれた。この豊富な米は三津に酒造業を発達させ、それは後に三浦仙三郎の先進的な醸造技術の開発と後継者の育成につながり、その技術は山陽鉄道の開通した西条において一層開花することになるのである。安芸国の穀倉地帯であり、陸上交通の要衝という本市の歴史文化の基本的特性は、安芸津地域があってさらにその意義を深くするのである。

第2節 関連文化財群

東広島市を特徴づける歴史文化遺産は、市域の中に単体で孤立して存在してきたのではなく、様々なものと有機的に関連を持ちながら存在してきた。本市における従来の文化財保護は、その点にあまり注意を払うことなく、個々の文化財の価値を評価して保護の対象としてきた。しかし、地域の文化財を指定・未指定を問わず幅広く捉え、価値を高めるには、それぞれの文化財が持つ背景と文化財相互の関連性に基づいたテーマごとに結びつけ、ストーリーを持って語ることが有益である。ここでいう関連性とは、歴史的関連性や地理的関連性、社会的な関連性などを指す。またそれ以外にも、時代を超えて関連を持つ事象や文化財でテーマを設定することも有効である。

前節で本市の自然環境・歴史・文化を俯瞰した際見えてくるのは、自然環境に規定されて人々が長い時間をかけて形成した安芸国最大の穀倉地帯という特性であり、大まかにいえば、本市の歴史・文化はこの特性に規定されているといえる。つまり、時代を超えて脈々と流れる本市域の特性が「安芸国最大の穀倉地帯」なのであり、次世代に受け継いでいくべきアイデンティティーなのである。一方で、市域で時代を超えて長い間受け継がれてきた特性だけに、この特性から派生する時代ごとの物語や文化財は多岐にわたる。そこで、“**安芸国最大の穀倉地帯**”を大テーマとし、そこから派生するストーリーとその証拠となる文化財群を小テーマの関連文化財群と定義することとする。

第3節 関連文化財群の設定

1 設定の基準

さて、前節において関連文化財群の大テーマを“**安芸国最大の穀倉地帯**”とした。大テーマは、東広島市の歴史文化の基底部を流れる本市の特性である。本来、この特性をもとに東広島市の歴史と文化を語るストーリー及びその証拠となる関連文化財群を設定することが望ましいが、全ての時代にまたがるとともに、様々な要素が重層的に含まれ、構成要素となる文化財群也多岐にわたる。よって、大テーマの中に小テーマを設け、保存・活用の便を図ることが求められる。一方、小テーマの項目もあまり多くなれば、項目間のボリュームの調整やバランスがとりにくくなることから、5〜7項目程度に絞ることとする。また、本市に所在する4つの重要な文化財、特別天然記念物オオサンショウウオ、史跡三ッ城古墳、史跡安芸国分寺跡、史跡鏡山城跡は、地域の豊かな環境や生産力を背景とした文化財である。これらの文化財はその周辺に豊かな関連文化財を有しており、これらを核とした関連文化

財群を設定することは、文化財の保存・活用の面でも効果が大きいことが期待される。

上記を踏まえた上で、次の4点を基準として、大テーマの中に小テーマを設け関連文化財群を設定する。

- ア 東広島市の歴史文化の基本的特性に関わりを持つ文化財群とする。
- イ 活用可能な文化財を含むものとする。
- ウ 魅力的なストーリーによって相互に関連付けられるものとする。
- エ 地域住民の活動と接点を持っているものとする。

2 関連文化財群の設定

前節の4点の基準をもとに以下の図のとおり7つの関連文化財群を設定した。

1～4までは核となる重要な文化財とその関連文化財群である。5と6は、安芸国最大の穀倉地帯を背景とした内陸部と沿岸部の生活文化を中心とした関連文化財群である。そして7は、近代の本市を代表する産業であり、沿岸部の三津で生まれた新しい醸造技術、西条で発展した酒蔵群、内陸部の酒米づくりというように市域全体でそれぞれの役割をもって担われた酒造業をテーマとした関連文化財群とした。

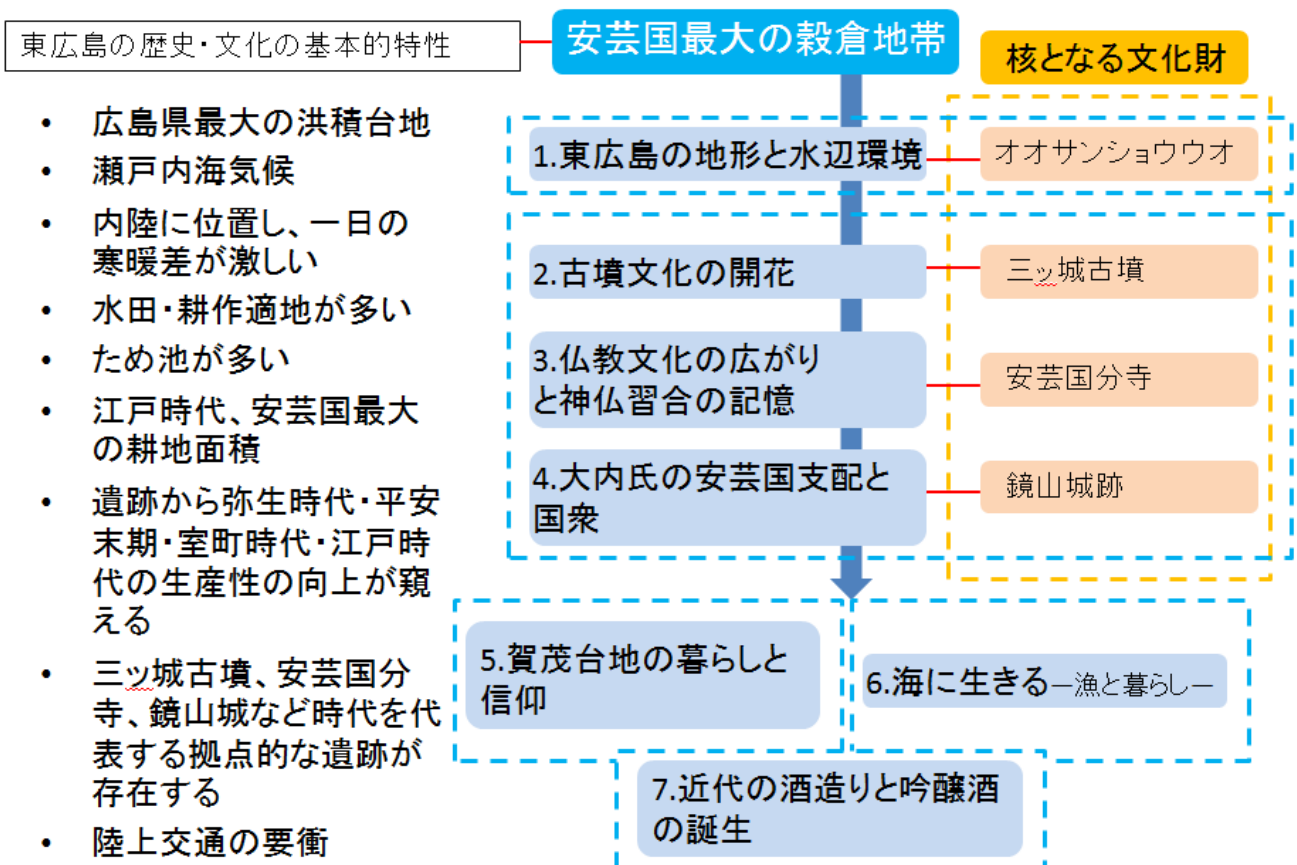


図 4-2 東広島市の歴史文化の特性と関連文化財群

1	東広島市の地形と水辺環境	主な構成文化財
ストーリーの概要	東広島市域は、瀬戸内海の沿岸部から標高 390mの北部高原地帯まで多様な自然環境のもとにあり、市域の最高峰は標高 922mを測る鷹巣山である。北部高原地帯は江ノ川水系、太田川水系、沼田川水系という広島県を代表する大河川の源流域、中部盆地地域は黒瀬川、入野川、瀬野川等中河川の源流域に当たる。年降水量が 1500 mm程度と少ないことや花崗岩地帯で帯水性が低いこともあって、数多くの溜池が造られ、東広島の水辺環境を特徴づけている。江戸時代には正保 3(1646)年の寺家大蔵田下池、明暦 2(1656)年の大蔵田上ノ池などが造られており、早くから溜池がこの地域の環境を形成していたことが知られる。 東広島市の環境は、人の手が入ることによって形成されており、人間の暮らしと密接なつながりがあることを特徴としている。丘陵部の植生は、長らく松を主体とした二次林であったが、近年の山林利用の減少やマツクイムシの被害に伴って照葉樹林へと急速に変化しつつある。このような山林には多くの動植物が生息している。農作物への被害が問題となっているシカやイノシシは増加の一途をたどっている。そのほかタヌキ、キツネ、ウサギはいうに及ばず、テンやムササビも比較的良く見られる。市域北部ではクマも確認されており、夏鳥であるブッポウソウの営巣も確認されるなど、生態系の豊かさを示している。 河川には生きた化石と称されるオオサンショウウオをはじめとした貴重な生物が住み、北部豊栄町域では産卵から孵化が行われる営巣地が確認されている。両生類ではオオサンショウウオの他にカスミサンショウウオが市内全域で市の天然記念物に指定されている。 水辺に集まる鳥類は江戸末期に書かれた「国郡志御用書上帳」等に記されるもののうち、トキを除いてその多くを現在も見ることが可能であり、水鳥の宝庫といえることができる。 溜池には多種多様な水草が生息しており、調査では 77 種もの水草が確認されている。中にはサイジョウコウホネのような西条盆地の固有種も見られ、生育環境である溜池とその環境の保全が求められる。 安芸津町域は市の南端に位置し、瀬戸内海に面している。標高が低く内陸部に比べて温暖である。現在では希少なウラボシなどの海辺の植物も見られる。 海域は三津湾と呼ばれる約 16km の弧状の海岸線で囲まれており、湾内に 7 つの島が存在する。いずれも小規模で、大芝島を除いて残りは無人島である。中にはホボロ島のようにナナツバコツブムシという昆虫の影響で生物浸食が進み、50 年程で大きく姿を変えた珍しい島もある。 海域に生息する魚類は、『安芸津町史』によればスジハゼやアミメハギなど 58 種が確認されている。この中にはセトカジカやヘビギンポなど瀬戸内海を特徴づけるけれども本州沿岸域では姿を消しつつある小型魚類が多く確認されている。そのほか多様なウミウシ類や造礁サンゴ類のキクメイシモドキの群落も確認されており、豊かな自然環境を示している。	ブッポウソウ、オオサンショウウオ カスミサンショウウオ サイジョウコウホネ ため池、ホボロ島、「国郡志御用書上帳」

※主な構成文化財の太字は指定文化財

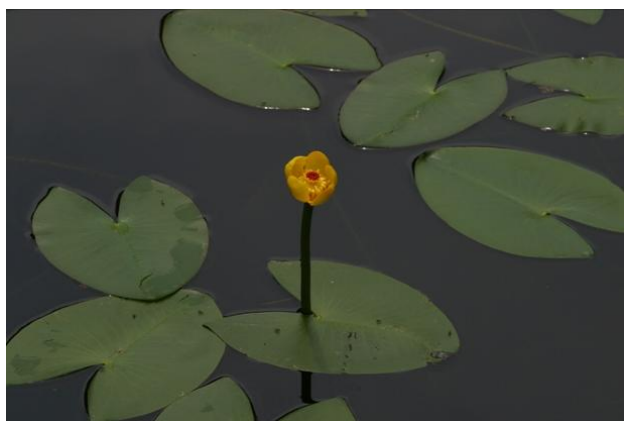


写真 4-1 サイジョウコウホネ

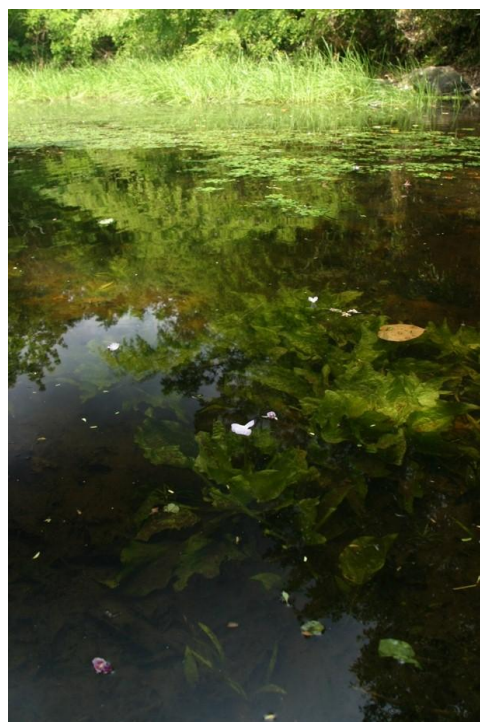


写真 4-2 ため池の水草



写真 4-3 ブッポウソウ



写真 4-4 オオサンショウウオ



写真 4-5 カスミサンショウウオ

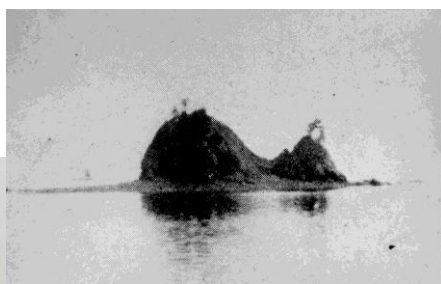


写真 4-6 ホボロ島（安芸津町）※上の写真は昭和 20 年代



写真 4-7 ウラギク（安芸津町）

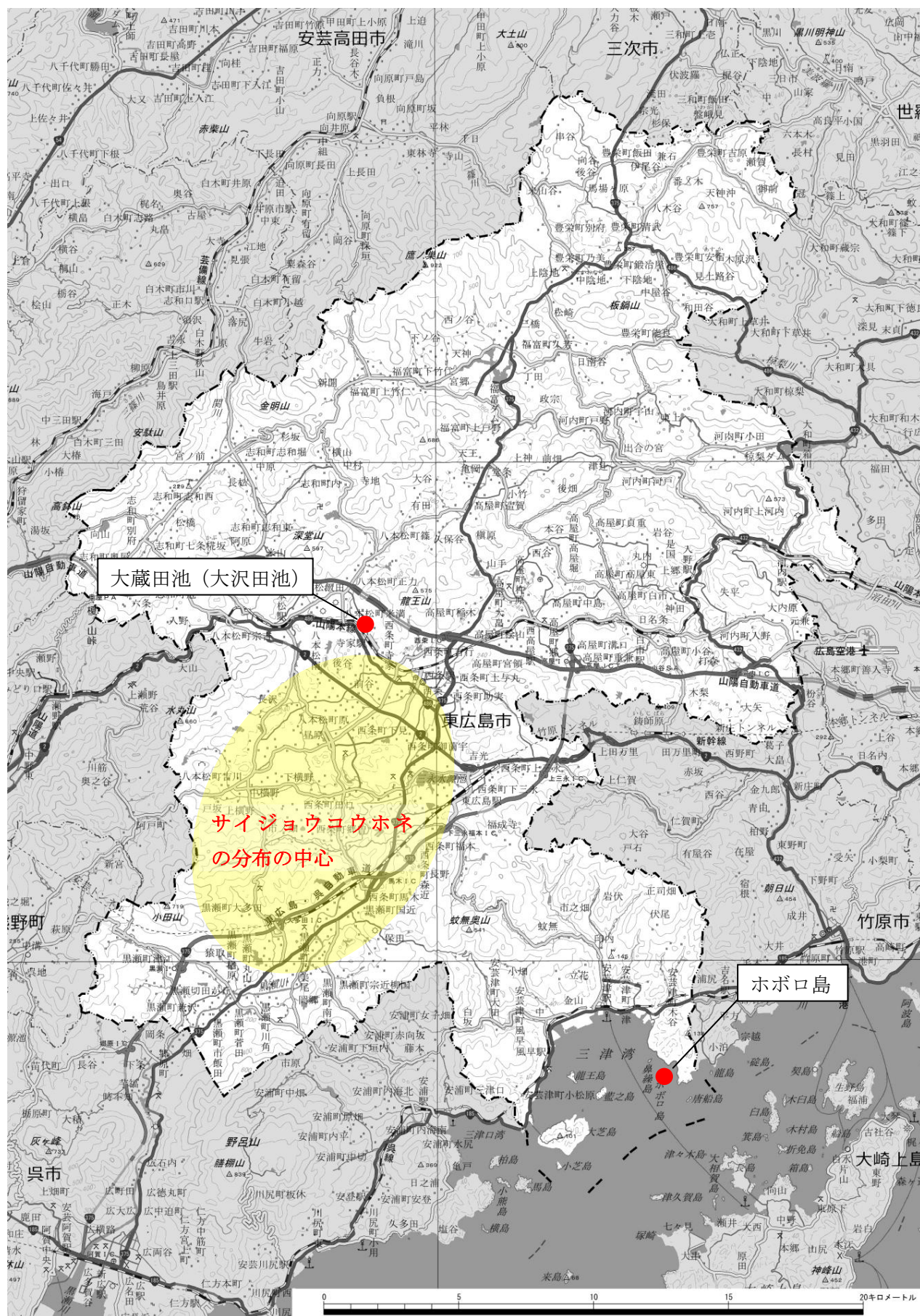


図 4-3 東広島市の地形と環境 関係地図

2	古墳文化の開花	主な構成文化財
ストーリーの概要	東広島市の中央部に当たる西条盆地は安芸地域で最も広い平野部を形成し、耕地の形成が進んでいる。弥生時代には台状墓や四隅突出墓、方形周溝墓など全国で様々な墓制が展開する。西条盆地でも貼石墓などの規模の大きな弥生墳墓が確認されている。そのような様々な墓制から発展したものが前方後円墳を頂点とする古墳時代の墓制である。広島県最大の前方後円墳は、西条盆地のほぼ中央の低丘陵上に造営された三ッ城古墳であり墓制の上でも安芸地域の中心的な存在であった。 この三ッ城古墳を筆頭に市内には 500 基前後の古墳があるとされる。その中には日本武尊の白鳥伝説に彩られ、三角縁神獣鏡等を出土した白鳥古墳や装飾付きの須恵器や鳥の形をした須恵器などを出土した沼田側流域の古墳など、地域性の豊かな古墳文化が花開いたことを示している。 古墳時代は国や郡といった地域のまとまりが形成されつつある時代である。そのプロセスは詳らかではないが、地域性豊かな古墳とその副葬品の存在は、主要河川の流域や盆地などの小地域にそれぞれ独自の文化が育ちつつあったことを示している。いうなれば、これらは東広島の文化の源流といえるだろう。 7 世紀に古墳時代が終焉を迎え、人々の記憶から古墳の存在そのものが忘れ去られる。多くの古墳は「塚」と呼ばれながらも、必ずしも墓であるとは考えられていなかったようである。しかし、近代に入って発掘調査が行われるようになると、古墳は 3 世紀から 7 世紀の墓であることが明らかとなった。「古墳」の再発見である。 古墳の大規模なものは、その規模の大きさ、使用された石の巨大さから古代豪族の権威の大きさを目の当たりにすることができる貴重な遺跡として地域のシンボルとなっている。	三ッ城古墳 仙人塚古墳 白鳥古墳出土品 山王古墳群 宮ヶ迫古墳群 丸山神社第 1 号古墳 スクモ塚第 1 号古墳 森信古墳群 胡麻古墳群 花が迫古墳群 塚土古墳 小越古墳 保田古墳群 岩幕山古墳 二反田第 1 号古墳 貝峠古墳出土台付鳥形瓶 日本武尊の白鳥伝説 火の釜の伝説

※主な構成文化財の太字は指定文化財



写真 4-8 三ッ城古墳（西条中央）



写真 4-9 岩幕山古墳（黒瀬町）



写真 4-10 山王第 6 号古墳石棺（豊栄町）



写真 4-11 仙人塚古墳石棺（高屋町）



写真 4-12 塔の丘古墳（豊栄町）



写真 4-13 保田古墳（黒瀬町）



写真 4-14 二反田古墳出土須恵器
（河内町）

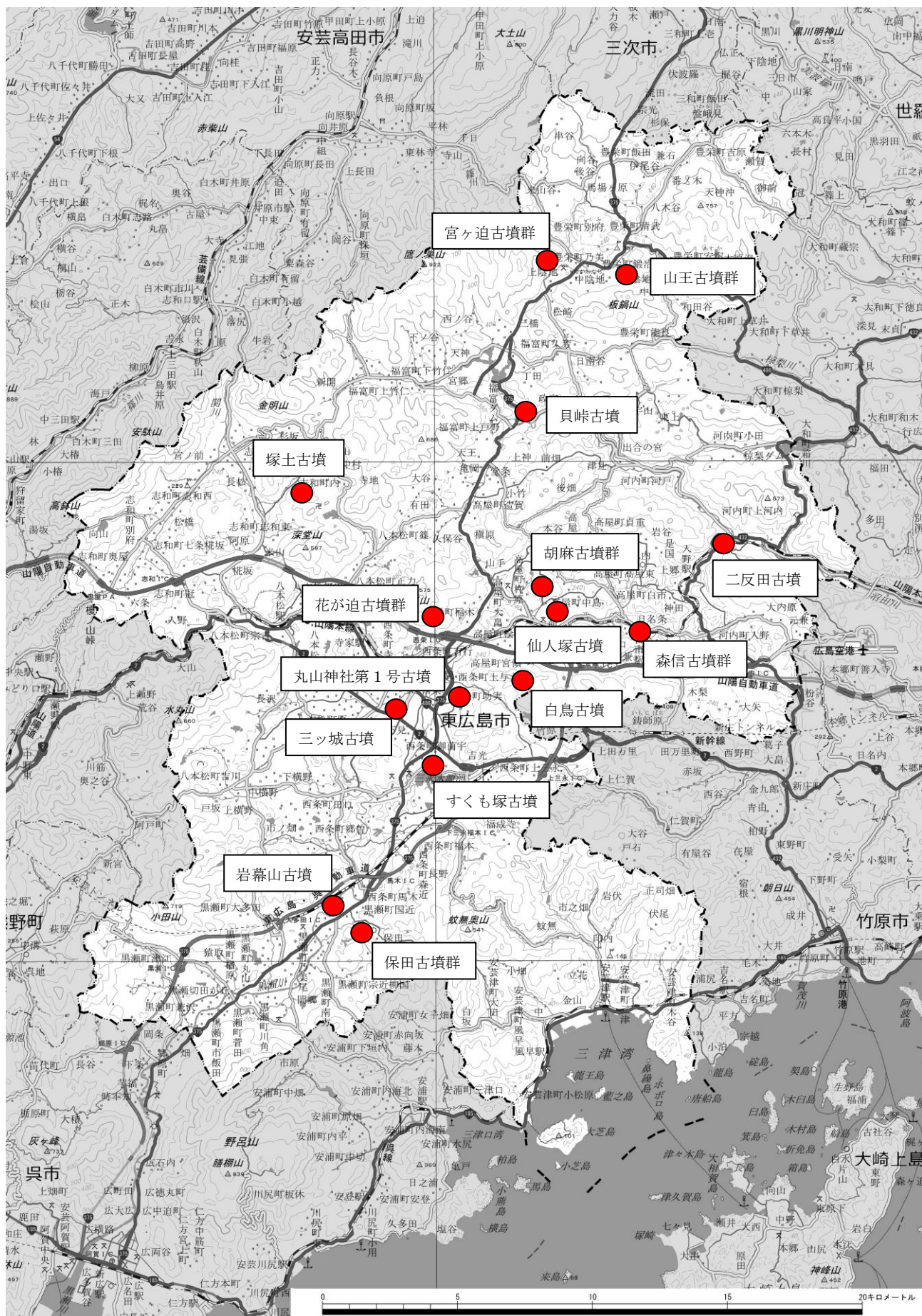


図 4-4 古墳文化の開花 関係地図

3	仏教文化の広がり と 神仏習合の記憶	主な構成文化財
ストーリーの概要	6世紀、日本に仏教が伝えられると朝廷の保護と関与により、現世利益の思想とともに瞬く間に全国に広がっていった。一方、本市域における仏教文化の広がり は奈良時代を一つの画期としている。天平13(741)年の聖武天皇の国分寺建立の詔によって建立された安芸国分寺はその代表的な存在である。安芸国分寺は発掘調査によって奈良時代の寺院の姿が明らかになっている。そのほか、福成寺を始めとして現在まで法灯を継ぐ密教系の山岳寺院はすべて奈良時代の開基を伝えている。 一方、神社は、発掘調査によって飛鳥時代の神社として話題になった西本6号遺跡を別として、平安時代の創建を伝える古社が多数見られる。この平安時代には、仏教信仰と日本固有の神祇信仰を融合させ、神と仏はもともと一つのもので、仏が我が国に神の姿を借りて現れたものだとする神仏習合の思想が広まった時代である。それ以来、神社と寺院は一体として発展してきた。寺院には鎮守社が建てられ、神社には仏像が祀られた。安芸国分寺の北に鎮座する石清水八幡神社は国分寺の鎮守社であったと伝えられ、福成寺には境内に六所権現が祀られる。豊栄町乃美の本宮八幡神社に平安期の大般若経が納められ、志和町志和堀の大宮神社には南北朝時代の大般若経・五部大乘経が奉納されている。 伝説や縁起は人々に神仏を身近に感じさせることに役割を果たしている。河内町入野の竹林寺は室町時代の縁起絵巻とともに小野篁の伝説を今に伝えている。 明治新政府は、1868年、神仏分離令を発し、全国の神社に仏像・仏具を神社から排除すること等を命じた。全国に廃仏毀釈と呼ばれる仏教排斥運動が起り、荒れ果てる寺院も多くあった。現在、神社と寺院が別のものと認識されているのはこれが要因であるが、二千年近く人々の意識に植え付けられた神仏に対する信仰は簡単には変わることはない。本市域においても廃棄を命ぜられた仏像や仏具をひそかに守り残した例は枚挙にいとまない。志和町志和堀の市中神社の銅鐘や黒瀬町乃美尾の門前神社の懸仏はその好例である。門前神社には19体もの懸仏が残り、中には鎌倉時代のすぐれた鑄造作品も見られる。これらは全て地域の人々が大切に守り伝えたものであり、長い神仏習合の記憶を今に留めるものである。	安芸国分寺 西本6号遺跡 西本6号遺跡出土品 国分寺薬師如来座像 八王子観音菩薩立像 紙本墨書大般若経（乃美） 福成寺本堂内厨子及び須弥壇 福成寺境内 福成寺地藏菩薩半跏像 並瀧寺 竹林寺本堂 竹林寺縁起絵巻 小野篁伝説 志和大宮神社 紙本墨書大般若経（志和堀） 五部大乘経 大宮神社宮蔵 鏡像（杵原地区） 乃美尾門前神社懸仏

※主な構成文化財の太字は指定文化財



写真 4-15 安芸国分寺跡 僧坊及び講堂跡（西条町）



写真 4-16 木造薬師如来座像(國分寺:西条町)



写真 4-17 竹林寺本堂（河内町）



写真 4-18 竹林寺縁起絵巻(部分)
(河内町)



写真 4-19 紙本墨書大般若經(本宮八幡神社：豊栄町)



写真 4-20 懸仏(門前神社：黒瀬町)

4	大内氏の安芸国支配と国衆	主な構成文化財
ストーリーの概要	室町時代の安芸国は、山口を本拠とし、九州北部から中国地方西部を押さえた大内氏と、管領という幕府の要職を務め、畿内から四国にかけて大きな勢力を持った細川氏という二大勢力の狭間にあり地政学的に重要な位置を占めた地域である。 室町時代の東広島市域は国衆の領域を除いてその多くが「安芸国東西条」（あきのくにとうさいじょう）と呼ばれ、山口の大内氏の領地であった。大内氏は西条盆地の中央に鏡山城を築き安芸国支配の拠点とするとともに、東の細川氏に対する最前線と位置づけた。 大内氏は、鏡山城を軍事的・政治的な拠点とする一方、地域の大寺院である福成寺を氏寺の山口興隆寺の末寺とし、宗教的・精神的な拠点とするとともに戦乱で荒廃した伽藍の再興に力を尽くした。 一方で、安芸国は南北朝時代以来、守護の権威が浸透せず、地域に根付いた国衆（くにしゅう）と呼ばれる豪族が勢力を持っていた特異な地域として知られている。国衆たちは盟約によって連合し、守護など大勢力に対抗するとともに、情勢によって二大陣営の一方を後ろ盾として乱世を生き抜いた。 本市域を根拠地とする高屋の平賀氏、志和東・志和堀の両天野氏は安芸国の国衆の中でも最有力の氏族として知られ、地理的な関係から大内氏に従うことが多かったとはいえ、同じく有力国衆の毛利氏、小早川氏、吉川氏、野間氏、阿曾沼氏らと同盟を組み、大名権力から一定の自立を図るとともに、政治的な課題を解決していた。 平賀氏は、後世白市と呼ばれる原初的な城下町を形成し、福岡八幡神社や竹林寺など多くの神社仏閣を造営して地域文化の基礎を形づくった。 東広島市の室町・戦国時代は、これら大内氏と平賀氏や天野氏といった国衆が合従連衡を通じて互いに影響しあうことによってつくられた。平賀氏ら国衆は、大内氏が滅亡し、毛利氏の時代となっても一定程度の独立を維持し、中世を通じて地域を支配することによって、地域に大きな影響を残したのである。	鏡山城跡、槌山城跡、平賀氏の遺跡、生城山城跡、福成寺厨子及び須弥壇、竹林寺本堂 杣城跡、米山城跡、殿様屋敷跡、福成寺、竹林寺、並瀧寺、七社神社

※主な構成文化財の太字は指定文化財

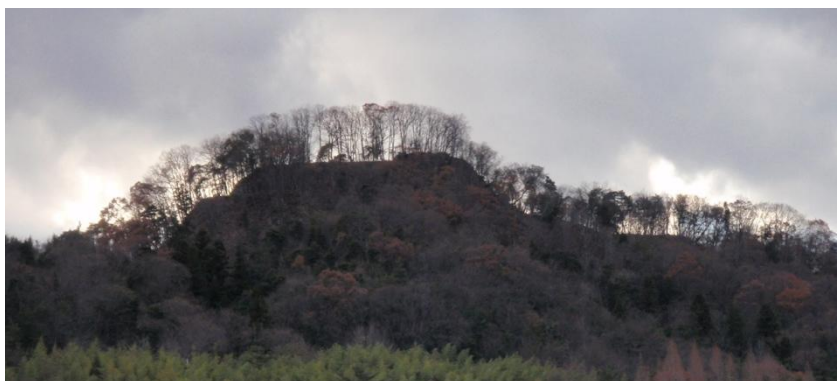


写真 4-21 鏡山城跡遠景（鏡山）



写真 4-22 杣城跡遠景（八本松町）



写真 4-23 槌山城跡遠景（八本松町）



写真 4-24 白山城跡遠景（高屋町）

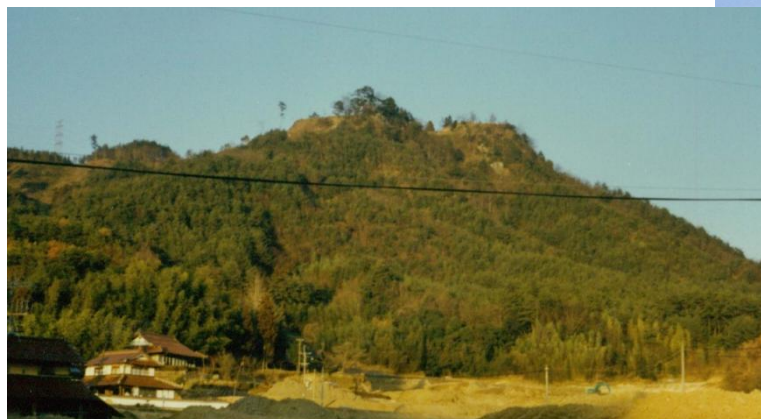


写真 4-25 頭崎城跡遠景（高屋町）



写真 4-26 米山城跡遠景（志和町）



図 4-6 大内氏の安芸国支配と国衆 関係地図

- 城跡
- 社寺

5	賀茂台地の暮らしと信仰	主な構成文化財
ストーリーの概要	広島県のほぼ中央に位置する賀茂台地は、標高 200m ほどの西条盆地と標高 400m ほどの豊栄町を中心とした地域である。広島湾に注ぐ太田川、日本海に注ぐ江の川、三原に注ぐ沼田川、呉に注ぐ黒瀬川のそれぞれの水源域にあり、水田の水はほとんど灌漑用のため池で賄う。そのため、ため池の数は旧市域だけで 2000 を超える。 南部の台地が賀茂郡であったのに対し、北部の台地は近代までは豊田郡に属していた。19 世紀初頭の地誌『芸藩通志』によれば、人口と耕地面積で賀茂郡が最も多く、豊田郡がこれに次ぐ。収穫高では豊田郡が最大で賀茂郡がこれに次ぐ。本市域は両郡の主要部に当たり、広島藩の穀倉地帯として知られていた。この豊かな生産力を背景にこの地域では多彩な農村文化が花開いた。 生産力の向上に寄与したのが農機具の改良と普及である。カラスキや馬鋤、各種鋤、鋤などの耕作具、千歯扱ぎや万石とおし、唐箕などの脱穀具など様々な機具が導入され利用された。 生産性の向上は農村に経済的・精神的余裕を生み出し、それは神社仏閣の造営や住宅の高級化を促進し、目に見える形で現在に残されている。豊栄町乃美の本宮八幡神社拝殿は、元禄 14(1701)年に建てられた旧本殿であり、当時最大級の本殿建築であった。高屋町高屋東の福岡八幡神社本殿は享保元(1714)年に建てられた市内最大の本殿で大坂の大工の手になる上方風の華麗な建築である。以後、安芸国では大坂の大工による神社仏閣の造営が増加するが、これはその先駆けとなるものである。 住宅については、庄屋身分以外の家でも、年代が下るにつれ大規模化していく。保存状態の良いものは少ないが、17 世紀末から 18 世紀前期という古い年代の住宅も一定数残っており、丁寧な建てられたことを窺うことができる。 18 世紀末から石見地方(島根県西部)の技術者により「石州瓦」と呼ばれる赤瓦の生産が始まる。明治以降、一般住宅にも普及し始め、戦後は爆発的に普及した。赤瓦を葺いた民家は「居蔵造り」と呼ばれる白壁の大規模な建築で、破風を連ね、鯨鉾をあげる豪壮なたたずまいは当地域の特徴となっている。 食生活においても、高い生産力を背景に他地域よりも相対的に豊かであった。米は年貢や換金作物であったが、麦類に混ぜて主食としたほか、粉末・屑米を粉にひいて団子や餅として食していた。近代には稲作を背景の一つとした酒造業が盛んとなった。副産物としての酒粕なども高価ながら他地域よりも手に入り易く、季節になれば粕汁や炙って食べるなどして利用された。 西条柿は、西条町寺家を原産地とする柿で、「長福寺縁起」に柿の由来が記される。江戸時代には広島藩の「西条柿奉行」が置かれるなど、名産品として知られていた。 嗜好品としての茶や煙草の生産も盛んであった。高屋町白市では、元禄年間以前に楮の栽培とともに茶の栽培が始まるとされる。その後、文久 2(1862) 年、平木久兵衛信隆が宇治の製茶法を学び帰り、郷民に進めるとともに茶畑を開拓し一大産地としたとされる。幕末には藩の統制下に白市に製茶場が設けられ、木原家が茶業掛り役を命じられるとともに製茶場も邸内に建てられた。 信仰面では、本市域を含む安芸地域は浄土真宗が盛んなことで知られており、信者	本宮八幡神社拝殿・本殿 明眼寺本堂 福岡八幡神社本殿 西品寺 養国寺 教善寺 教順寺 順教寺 小松原説教場 平木久兵衛の碑 旧木原家住宅 居蔵造の農家 西条柿伝承地 長福寺縁起 煙草乾燥小屋 清田塾跡 野阪完山の墓 五行祭 小田神楽 トンド(神明さん) 吹囃子 盆踊り 鶴亭日記

は「安芸門徒」と称せられた。門徒は、村落内の地域ごとに数軒から十数軒を単位に「講」を組織し、信仰のみならず生活共同体としての性格を持ち合わせていた。講の構成員は「講中」と呼ばれ、「講中頭」などと呼ばれる世話人を中心に運営されていた。講中のつきあいは、家普請・屋根替え・出産・結婚・病傷・罹災・葬祭などあらゆる面に及び人々の生活に大きな影響を与えた。講中は、講の財産というべきものを持っており、月毎・年毎の掛金の積立のほか、経文・仏具・食器・座敷道具など、共有の器物類があった。現在も各地に「講中茶碗」などと呼ばれる漆器などが保管されている。

浄土真宗の寺院は、このような講中とその信仰に支えられており、住職が世襲であることと相俟って、特に農村部において大きな影響力を持った。

宗教行事は、「御正忌(報恩講)」を始め、春・秋の「彼岸会」、5月の親鸞聖人の誕生日を祝う「降誕祭」、親鸞聖人の命日の前日に行う「お逮夜」などが行われた。これらの年中行事は、規模は縮小したが、現在でも各地で行われており、門徒の信仰の篤さを示している。

安芸津町小松原の説教場は、現在もこのような年中行事の際に僧侶の説教を聴く「聴聞会」が開かれる道場の一つである。

門徒は、念仏一向を志し、雑行雑修を排する傾向が強いことから、門徒の間では年中行事は簡素なことが多い。とはいえ、他宗の信者も一定数おり、安芸門徒でも神社の祭礼などは盛んに行っている。市域では五行祭と呼ばれる祭文の語りを中心とした神楽が盛行し、庶民の娯楽として発展した。現在も北部を中心に折に触れて演じられている。また、吹囃子と呼ばれる祭礼行列も北部の神社を中心によく保存されている。

年中行事もそれほど豊富ではないが、いくつかは現在も行われている。正月15日を中心に市内各地で行われるトンド(左義長)は、地区ごとに杉、竹やワラで組み上げた塔を燃やす行事で、大きいものは十数mに及ぶものもある。平安時代の三毬打に由来するとする説もある。高屋町白市と安芸津町では「神明さん」と呼ばれる。夏は盆踊りである。市域では、18世紀末には既に行われていたことが知られるが、昭和期には西条地区の「西条盆踊り大会」が開催され、全国から集まって競演が行われていた。

庶民教育の場である寺子屋は、18世紀中期以降各地で造られるようになるが、本市域では19世紀初頭まで下る。教師は神官、医師、僧侶、平民など多岐にわたった。寺子屋が初等教育を担ったのに対し、中・高等教育は私塾が担当した。私塾には、四日市山田氏の怡雲山館、福富町久芳の黒川氏の松溪塾、河内町入野の清田塾などが知られている。特に西条町寺家の医師野阪完山の塾は、文政12(1829)年には既に門人196人、滞留の門人26人の記録があり、他国からの留学生は9人とされている。完山は医師であったので、教育は夜間に行い、昼間は医療活動に専念した。野阪完山は『鶴亭日記』と名付けた日記を残しており、当地域の暮らしや習俗を知る貴重な資料となっている。

※主な構成文化財の太字は指定文化財



写真 4-27 本宮八幡神社拝殿（豊栄町）



写真 4-28 福岡八幡神社本殿（高屋町）



写真 4-29 養国寺山門（高屋町）



写真 4-30 五行祭(豊栄神楽)（豊栄町）



写真 4-31 野坂完山の墓
（西条町）



写真 4-32 居蔵造りの民家



写真 4-33 西条盆踊りポスター
（昭和 10 年）

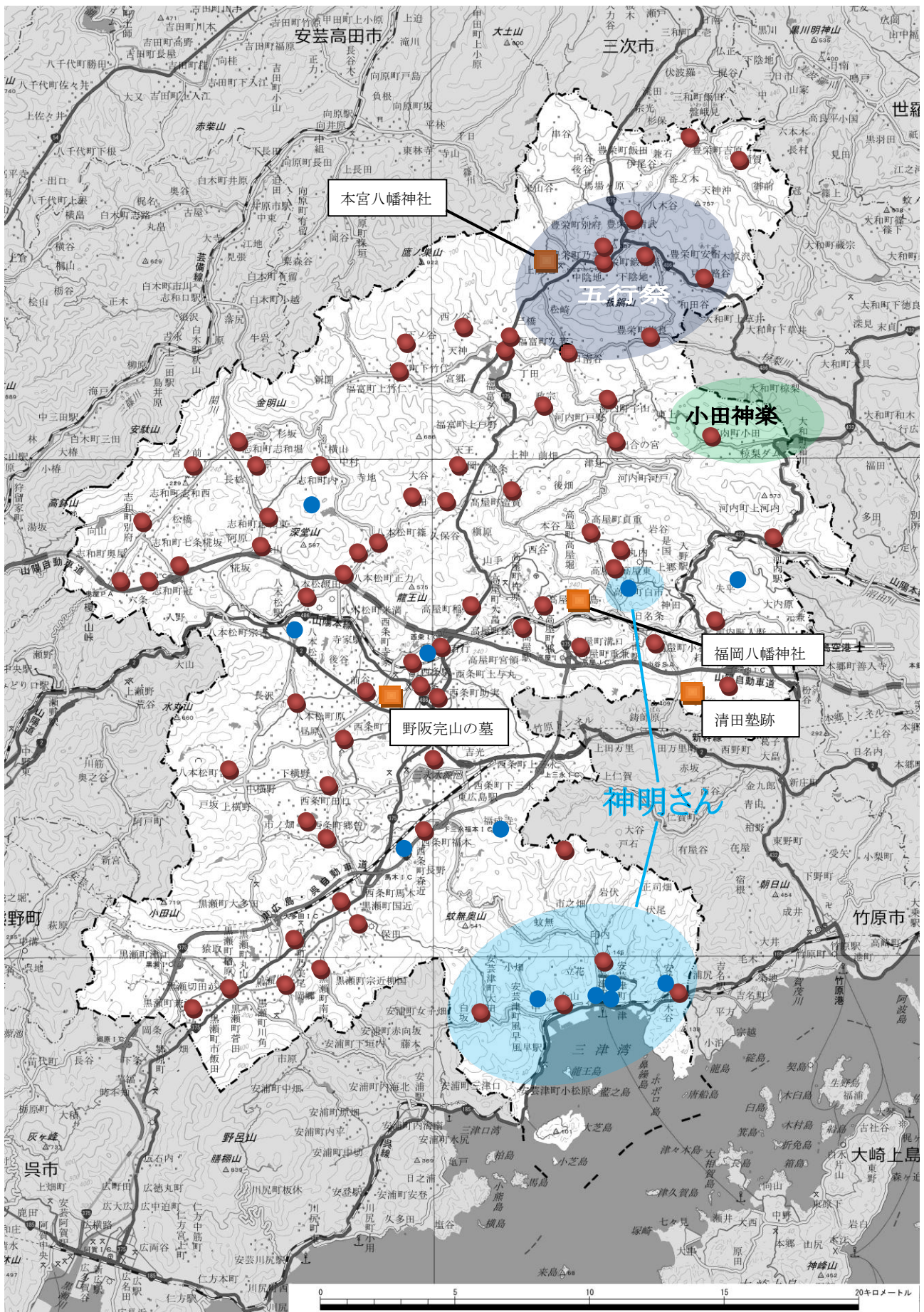


図 4-7 賀茂台地の暮らしと信仰 関係地図

- 浄土真宗寺院
- 他宗寺院
- その他の関連文化財

6	海に生きる一漁と暮らし	主な構成文化財
ストーリーの概要	市域で唯一瀬戸内海に面する安芸津地域は、近代に至るまで木谷だけが豊田郡に属し、他は賀茂郡に属する二つの郡から成る地域であった。しかし、中世には木谷・三津・風早が三津三浦と呼ばれ、一体として発展するという歴史をたどっている。 江戸時代には三津に広島藩の御蔵所（御米蔵）が置かれ、賀茂郡及び豊田郡の一部の米が集められ、大坂の蔵屋敷や広島城下に運ばれた。また、木谷や風早には塩田が造られている。 木谷は広島藩内でも有数の廻船の拠点があった港として知られており、全国各地に元屋万助など廻船業者の寄進物が残されている。安芸津町内でも三津の榊山神社や福寿院、正福寺に石造物や絵馬、木谷の重松神社や三種神社などに石造物や絵馬が寄進されている。 彼らの活動範囲は東北から江戸にまで及び、各地に足跡が残っている。中でも木谷村の善松は文化3(1806)年、遠州灘で遭難し、アメリカ船に救助されてハワイを経て帰国している。 木谷が廻船業で栄えたのに対し、その他の地区は近距離の廻船や漁業を盛んに行っていた。安芸津の漁業は鎌倉時代、生口島の佐久間孫大夫が当地に移り住み、小網を用いて始めたと伝えられる。弘安3(1280)年、孫大夫は網にかかった薬師如来を祀る小堂を建てた。この像は現在も正福寺に祀られている。 芸備地方の漁場は6漁場に区画され、地先にはその漁場での漁業優先権が認められていた。安芸津町域は、大芝漁場(賀茂郡)と豊浦漁場(豊田郡)に含まれる。鯛やイワシ、ワチ、タコなどが良く捕れたようである。 漁法にはウタセ、小網、延縄、ゴチ網、タコ釣、タコ壺、イカ釣、イカ網、手繰網、ワチ叩き網、ボラ網などがあった。また、沿岸の小河川の河口ではシロウオ漁がモチ網、定置網などで行われ、春先の風物詩として知られていた。	元屋跡 二馬手塩浜 本江塩浜 榊山神社 正福寺 重松神社 重松神社奉納額 三種神社 三津港 大芝漁場の漁業慣行 藍島の明神さん タコ壺 白魚漁 イカカゴ カキ筏



写真 4-34 安芸津町空中写真



写真 4-35 三種神社の船絵馬(部分) (安芸津町)



写真 4-36 現在の三津港 (安芸津町)



写真 4-37 二馬手塩田の樋門跡 (安芸津町)



写真 4-38 明治期の元屋(光保家)



写真 4-39 龍王島周辺のカキ筏 (安芸津町)

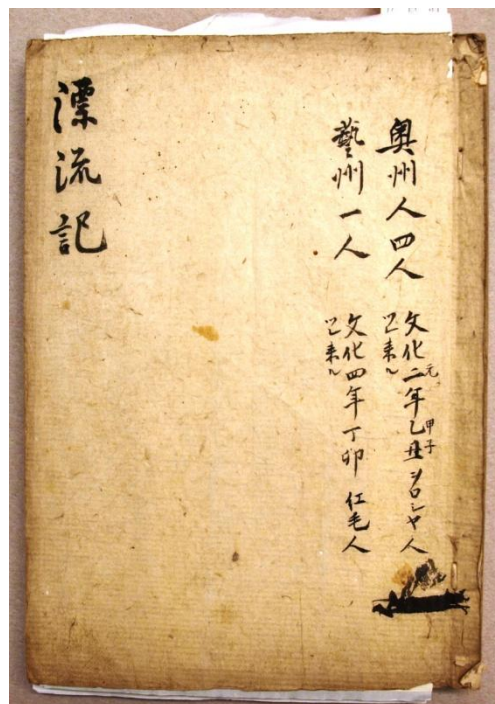
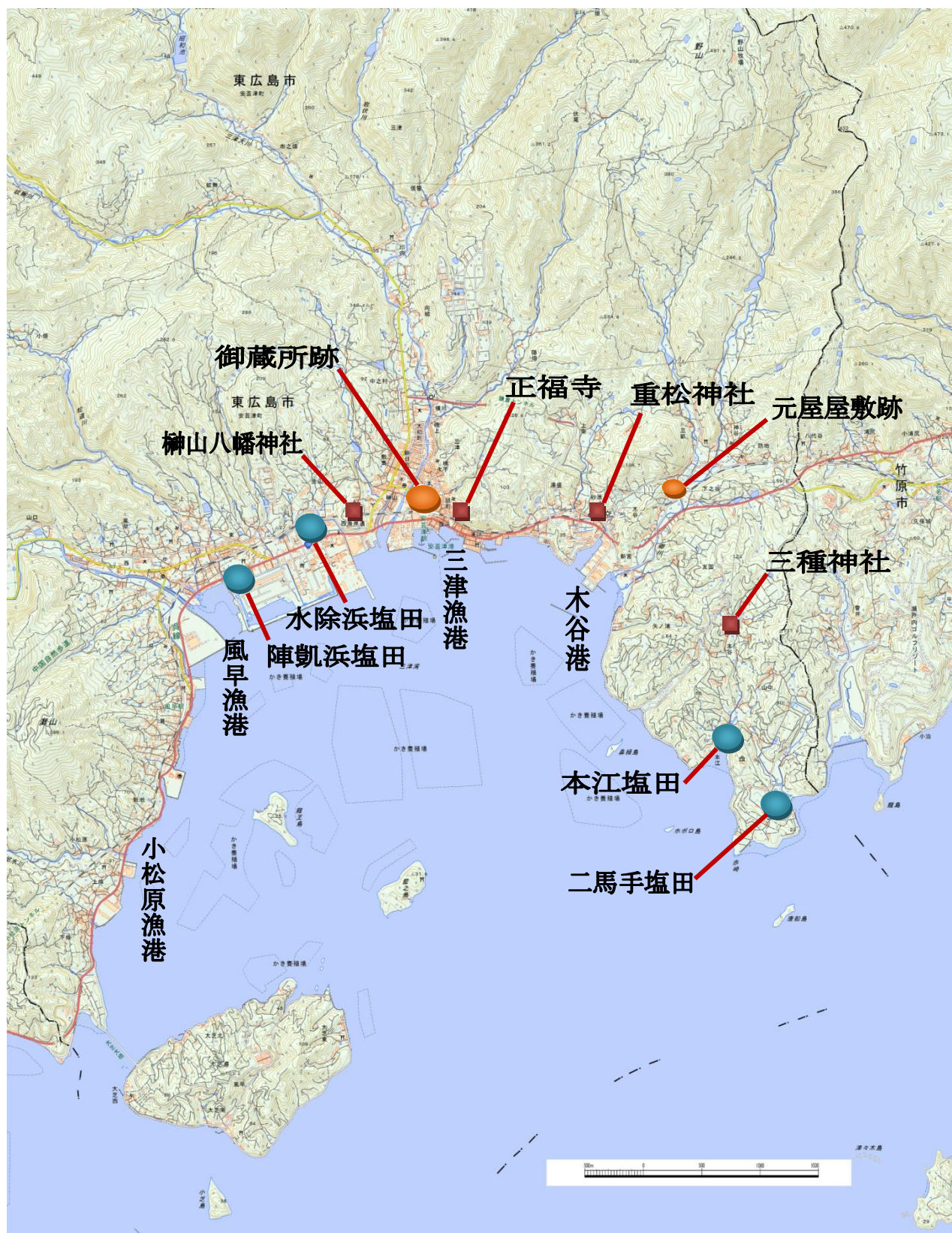


写真 4-40 「漂流記」表紙



- 社寺
- 塩田
- その他の関連文化財

図 4-8 海に生きる一漁と暮らし 関係地図

7	近代の酒造りと吟醸酒の誕生	主な構成文化財
ストーリーの概要	安芸国分寺から出土した9世紀の須恵器に「酒」の墨書が見られ、古くから酒との関わりが窺える。当地域には、酒の起源を窺わせる神事も行われている。西条町郷曾の石神八幡神社では年占神事として甕に清水と蒸米と米麴を入れてできる酒によって豊凶をはかる「神量神事祭(みはかりしんじさい)」が行われている。 本格的な酒造については、三津の菅家が天正6(1578)年の創業を伝えており、中世末期には既に始まっていたとされる。 西条は、西国街道の宿場四日市宿を中心に発展するが、その四日市宿では島家が延宝3(1675)年の創業とされる。当時の酒造蔵を今なお有しており、現存最古の酒造蔵として貴重な存在である。また、白市の木原家でも元禄年間には既に酒造を始めており、重要文化財の旧木原家住宅主屋の背後に井戸や酒造蔵の基礎が残る。この時代の酒造は藩の規制もあり、まだ地域の需要を満たす程度の小規模生産であった。 明治維新を迎え、酒株によって強く規制されていた酒造業は免許制度により自由に生産・販売できるようになった。三津は瀬戸内海に面した立地を利用し、近代になって初めて県外に酒の販路を求めた地域である。酒造が自由化され各地で酒造が盛んになると競争力に劣る地方の酒造は苦戦を強いられることになる。こうした中、酒質改良に乗り出した一人が三津の三浦仙三郎である。三浦は腐造に苦しみながらも諦めることなく酒造を続け、銘醸地灘で研鑽を積み、酒質向上に努めた。広島地方は当時酒づくりに向いていないとされた軟水地帯であるが、三浦は温度管理と衛生管理を徹底することで低温長期発酵という吟醸造りの基礎を確立した。また、杜氏の育成に努め、「三津杜氏」後に「広島杜氏」と呼ばれる杜氏集団を育てた。この杜氏たちが全国に広がり、広島流の吟醸造りを広めることになる。 一方、西条でも維新後、島家のほかに木村家、石井家などが酒造を始め、優れた水質を利用して名声を高めていたが、転機となったのが明治27年の山陽鉄道の開通である。西条の酒造家たちは酒蔵に程近い所に駅を誘致し、鉄道での酒の輸送の便を図ったのである。また、三浦の軟水醸造法と三津杜氏の技術により、井戸の場所に規制されずに酒蔵が建てられるようになり、広い敷地を求めて市街地を出て郊外に広大な酒造蔵が建てられた。現在の西条酒蔵群の景観はこのようにして形成されたものである。 鉄道によって大量輸送が可能になった西条であったが、標高200mの盆地に位置し河川が少ない土地柄であったため、灘で発達した水車精米を利用することが困難であった。そこで佐竹利市は明治29年、動力式精米機を造り、さらに明治41年、「佐竹堅型金剛砂精米麦機」を発明し、吟醸酒に欠かせない高白精米を可能にしたのである。 現在の吟醸酒の要件である精米歩合60%以下に酒米を研削する技術や長期低温発酵という技術の基本は東広島で生まれた。現在、酒造会社は地域と共同で水源の森を守る活動を行っており、水の保全という方向からも酒文化の継承がなされている。	安芸国分寺 石神八幡神社の神量神事祭 旧木原家住宅 白牡丹酒造 賀茂泉酒造 賀茂鶴酒造 亀齢酒造 旧広島県醸造試験場西条支場 西條鶴醸造 福美人酒造 山陽鶴酒造 柄酒造 今田酒造 榊山神社 三浦仙三郎別荘 三浦仙三郎遺品 サタケ 松尾神社 西国街道 大峠の年貢道 化粧薦樽作成技術

※主な構成文化財の太字は指定文化財



写真 4-41 旧木原家住宅（高屋町）



写真 4-43 賀茂鶴酒造本社（西条本町）



写真 4-45 西条の酒蔵



写真 4-42 三浦仙三郎銅像（安芸津町）



写真 4-44 旧広島県醸造試験場西条支場醸造蔵
（西条上市町）



写真 4-46 榊山八幡神社（安芸津町）

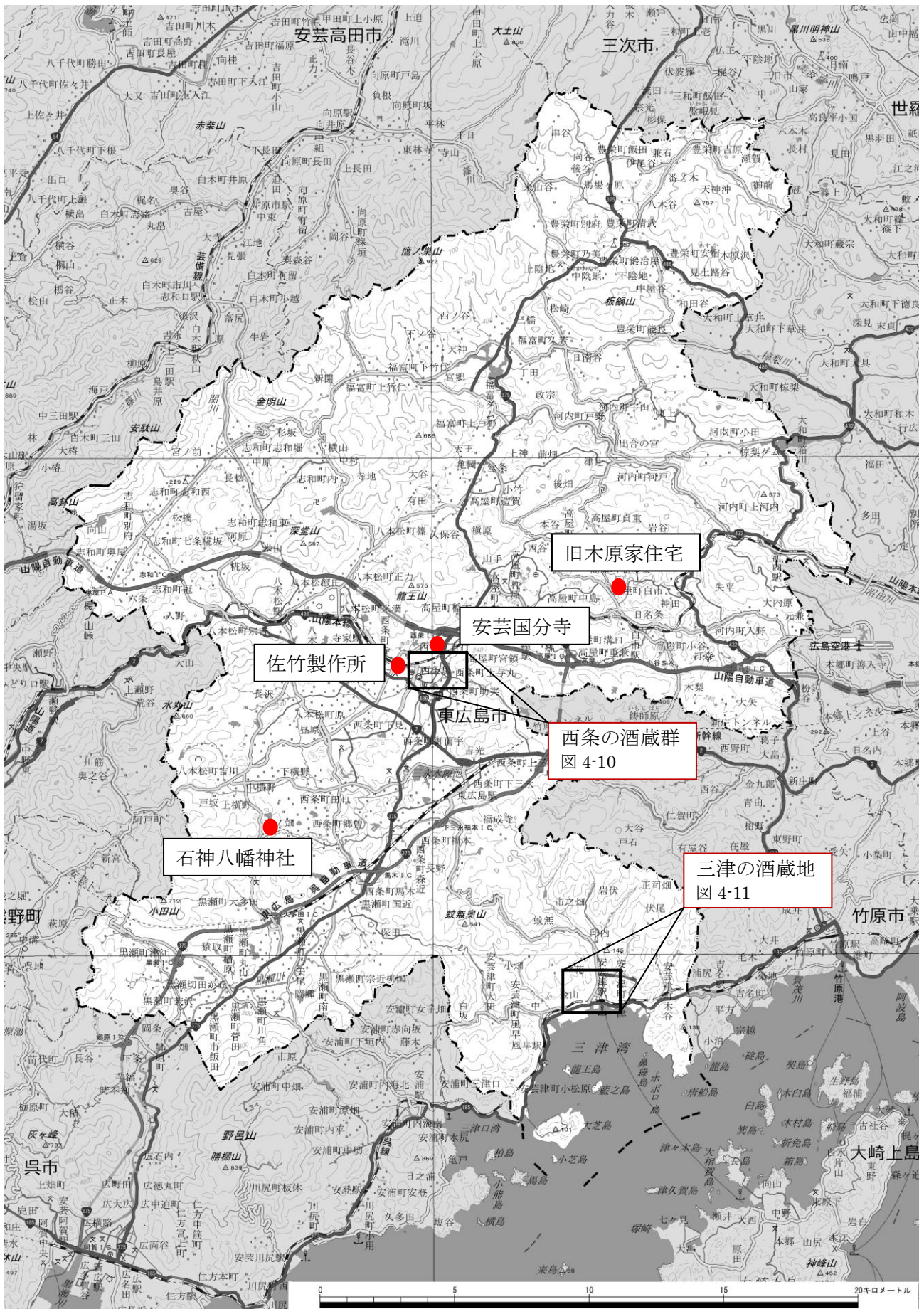


図 4-9 近代の酒造りと吟醸酒の誕生 関係地図

